

横查情報月報



2011
5011
3月

横浜市衛生研究所

平成 23 年 3 月号 目次

【トピックス】

平成 22 年度 公衆浴場浴槽水の水質実態調査	1
アレルギー物質を含む食品の検査結果 (その 3)	3
残留農薬検査 (その 4)	4
輸入鶏肉中の動物用医薬品検査結果	7

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成 23 年 2 月	8
--------------------------------------	---

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報 (平成 23 年 2 月分)	13
--	----

平成22年度 公衆浴場浴槽水の水質実態調査

横浜市内の公衆浴場における施設の衛生管理状況を把握することを目的として、浴槽水の水質実態調査を行いました。

1 対象施設及び試料

- (1) 対象施設：公衆浴場108施設(レジオネラ検査のみを行った1施設を含む)
- (2) 採水日：平成22年6月15日から平成22年12月14日
- (3) 浴槽水試料：白湯184、温泉36、薬湯25、その他6(海水4、死海水1、死海の泥1)の計251試料
レジオネラ検査試料：白湯31、温泉10、薬湯5、回収槽水1、採暖槽水1、ふきとり4の計52試料。基準を適用した試料は46試料(白湯31、温泉10、薬湯5)。

2 検査項目

- (1) 福祉保健センター現場検査項目：遊離残留塩素濃度^{*1}、pH^{*1}、水温^{*1}
 - (2) 衛生研究所検査項目：大腸菌群、レジオネラ属菌、過マンガン酸カリウム消費量^{*2}、濁度^{*2}、一般細菌^{*1}
- ^{*1} 水質基準に該当しない参考項目
^{*2} 過マンガン酸カリウム消費量及び濁度については、温泉、薬湯及びその他の試料では原則として検査対象外としました。

3 検査方法

水質基準項目については、神奈川県公衆浴場施行細則第7条第2項に定める方法、その他の項目については上水試験方法等に準じて行いました。

4 検査結果

(1) 水質基準不適合試料数

浴槽水251試料の水質基準不適合試料数を表1に示しました。水質基準に適合しない試料は2施設2試料(白湯1、温泉1)でした。

表1 浴槽水の試料数及び水質基準不適合試料数

浴槽水	白湯	温泉	薬湯	その他	合計
試料数	184	36	25	6	251
水質基準不適合試料数	1	1	0	0	2

また、レジオネラ検査で基準を適用した46試料のうち、水質基準に適合しなかった試料は8施設13試料(白湯7、温泉5、薬湯1)でした。

(2) 検査項目別の水質基準不適合試料数

検査項目別の試料数及び水質基準不適合試料数を表2に示しました。大腸菌群は2施設2試料、レジオネラ属菌では29施設中、8施設13試料(白湯7、温泉5、薬湯1)が水質基準に適合していませんでした。過マンガン酸カリウム消費量及び濁度について白湯では基準にすべて適合していました。

なお、表2に計上はしましたが、過マンガン酸カリウム消費量及び濁度については、温泉、薬湯及びその他の試料では原則として水質基準を適用しません。

今回の検査では、レジオネラ属菌の基準超過率は28.3%で、他の検査項目の基準超過率(濁度0%、過マンガン酸カリウム消費量0%、大腸菌群0.8%)に比較して非常に高い値を示しました。

また、遊離残留塩素は34試料(白湯17、温泉10、薬湯7)が0.2mg/L未満の値を示しました。

表2 検査項目別の水質基準不適合試料数

検査項目	基準不適合試料数/試料数				水質基準
	白湯	温泉	薬湯	その他	
大腸菌群	1/183	1/39	0/22	0/6	1cfu/mL以下であること
レジオネラ属	7/31	5/10	1/5	0/0	検出されないこと
過マンガン酸カリウム消費量	0/182	15/23	3/19	4/4	25mg/L以下であること
濁度	0/182	0/23	0/19	0/4	5度以下であること
遊離残留塩素	17/184	10/36	7/22	0/4	0.2mg/L以上(参考値)
pH(参考項目)	-/182	-/34	-/29	-/5	
一般細菌(参考項目)	-/183	-/39	-/22	-/6	

- : 水質基準適用対象外

(3) 水質基準不適合施設における施設別の水質検査結果

水質基準に適合しなかった10施設15試料の結果を表3に示しました。A、B施設は大腸菌群、C～J施設はレジオネラ属菌による水質基準不適合でした。

大腸菌群が基準超過となったA、B施設は一般細菌数も40,000 cfu/mL及び50,000cfu/mLと多く、遊離残留塩素が検出されていなかったことが原因と考えられました。

過マンガン酸カリウム消費量はJ施設の3試料が水質基準の25mg/Lを超過しましたが、原水が温泉であるため、水質基準を適用しませんでした。

レジオネラ属菌が水質基準に適合していない18施設13試料(試料No.3～15)では、検出された菌数は $10^1 \sim 10^2$ cfu/100mLで、分離された菌種はすべて *Legionella pneumophila* でした。13試料の遊離残留塩素は0.2mg/L以上で、遊離残留塩素があってもレジオネラ属菌は検出されていました。また、基準を適用しない回収槽水1、採暖槽水1、ふきとり4の6試料のうち、ふきとり1試料からレジオネラ属菌が検出されました。

水質基準不適合となった施設については、所管する福祉保健センター生活衛生課環境衛生係が衛生指導を行いました。後日、施設D・E・F・Hについてはレジオネラ属菌の再検査を当所で行い、その結果、レジオネラ属菌は検出されませんでした。

表3 水質基準に適合しない8施設15試料の施設別水質検査結果

施設	試料 No.	浴槽水 種類	濁度 (度)	過マンガン酸 カリウム消費量 (mg/L)	一般細菌 (cfu/mL)	大腸菌群 (cfu/mL)	レジオネラ 属菌 (cfu/100mL)	遊離残留 塩素 (mg/L)
A	1	白湯	0.2	4.2	50,000	1,100	-	0.0
B	2	温泉	-	-	40,000	6	-	不検出
C	3	温泉	-	-	24,000	0	400	0.5
	4	温泉	-	-	1,300	0	200	0.4
D	5	温泉	-	-	1,100	0	300	0.4
	6	温泉	-	-	610	0	210	0.2
E	7	白湯	0.1未満	1.8	6	0	150	0.2
F	8	白湯	-	7.0	130	0	110	0.2
	9	白湯	-	5.2	66	0	120	0.5
G	10	薬湯	0.2	11	5	0	230	0.4
H	11	白湯	0.2	6.3	130	0	110	0.4
I	12	温泉	-	-	180	0	390	0.5
	13	温泉	0.1未満	25超	1	0	110	0.5
J	14	温泉	0.1	25超	15	0	40	0.5
	15	温泉	0.1未満	25超	36	0	60	0.7

太字ゴシック:水質基準超過

-:検査未実施または検査対象外

レジオネラ症患者の報告数は横浜市内で平成18年7名、平成19年28名、平成20年32名、平成21年16名、平成22年28名と増減しています。これらの感染原因施設のひとつとして、公衆浴場が考えられています。

レジオネラ属菌は、試験管内に単独で水中に浮遊している場合には、0.2mg/Lの遊離残留塩素に1分間接触させれば殺菌されますが、実際には、ろ過器や配管等のバイオフィーム*1に生息するアメーバ内で増殖したレジオネラ属菌は、アメーバから水中に放出されると濁質に付着して浮遊するため、1.0mg/Lの遊離残留塩素があっても、すぐに殺菌されないことがあります。レジオネラ属菌数を制御するには、遊離残留塩素の濃度管理の他に、浴槽やろ過器を含めた浴槽水の循環経路の衛生管理が重要です。

*1バイオフィーム:スライム、ぬめりのこと。自然界に広く存在し、細菌、真菌(カビ)、藻類、原生動物などで構成される。写真は配管内から採取したバイオフィーム。

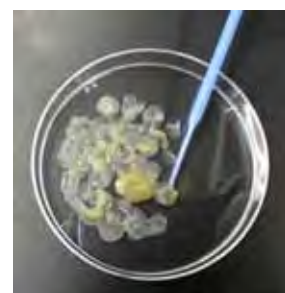


写真 浴場施設配管内から採取したバイオフィーム

【検査研究課 水質担当】

アレルギー物質を含む食品の検査結果(その3)

平成13年4月、食物アレルギーを持つ人の健康危害を未然に防止する観点から、アレルギー物質(特定原材料)を含む食品に表示が義務付けられました。現在、特定原材料として卵、乳、小麦、そば、落花生、えび、かにの7品目が指定されています。

平成23年1月に、健康福祉局食品専門監視班および各福祉保健センターが、横浜市内の保育園および市内製造所において収去したもの、並びに通信販売で買上げた食品について、卵の検査を行いました。その検査結果を報告します。

なお、平成22年4月および9月に行ったアレルギー物質の検査結果については、平成22年6月および11月の検査情報月報に掲載されています。

1 卵の検査

給食および菓子類31検体について、卵の検査を行いました。ELISA法によるスクリーニング試験の結果、いずれも陰性(10ppm未満)でした(表)。

食品	検体数	陽性数
菓子類	14	0
その他の食品(弁当・そうざい類)	10	0
アイスクリーム類・氷菓	3	0
その他の食品(容器包装詰加圧加熱殺菌食品)	2	0
魚介類加工品	1	0
肉卵類及びその加工品(食肉製品)	1	0
合計	31	0

ELISA(Enzyme Linked ImmunoSorbent Assay)法とは、特定原材料の中に含まれるタンパク質を抗原抗体反応を利用して検出する方法です。

例えば、卵の場合、検体抽出液中に卵白アルブミン、オボムコイド等のタンパク質(抗原)が含まれていると、特異的な抗体がコーティングされているプレート内に固定されます。夾雑物を除くためにプレートを何度か洗浄した後、発色物質が標識されている抗体をプレートに入れ、プレートに固定されたタンパク質と結合させます。再度洗浄し、余分な発色物質を除いた後、酵素反応により発色させて、マイクロプレートリーダーという分析機器で吸光度を測定します。標準溶液の吸光度を用いた標準曲線から検体の卵タンパク質濃度を算出し、10ppm以上の場合を陽性と判定します。

【検査研究課 食品添加物担当】

残留農薬検査(その4)

当所では、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より農作物当たりの検査項目数を追加し、検査体制を一層強化しています。

今回は、平成23年1月から2月末の期間に食品専門監視班より搬入された農作物等の検査結果を報告します。

1 国内産農作物

1月に搬入されたしゅんぎく(3検体)、みかん(2検体)及びはくさい(1検体)の計6検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、しゅんぎく3検体及びはくさい1検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 輸入農作物

1月に搬入されたグレープフルーツ(5検体)、オレンジ(4検体)及びアボカド(1検体)の計10検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、グレープフルーツ4検体、オレンジ2検体及びアボカド1検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査で検出された農薬の概要については、6ページの【農薬解説】を参考にしてください。

表1 残留農薬検査結果

(H23年1月～H23年2月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検 出検体 数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
国内産農作物						
しゅんぎく	国産	3	1	フェントロチオン	0.04	0.2
			1	フェントロチオン	0.02	0.2
			1	クロチアニジン	0.06	0.2
みかん	国産	2	0			
はくさい	国産	1	1	ボスカリド	0.02	3.0
輸入農作物						
グレープフルーツ	アメリカ	5	1	イミダクロプリド	0.01	0.7
				メチダチオン	0.07	5
			1	イミダクロプリド	0.02	0.7
			1	クロルピリホス	0.01	1
			1	イミダクロプリド	0.01	0.7
オレンジ	オーストラリア	4	1	クロルピリホス	0.01	1
			1	メチダチオン	0.34	5
アボカド	メキシコ	1	1	シペルメトリン	0.03	0.1

表2 農薬の検査項目及び検出限界(114項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
BHC (、 、 及び の和)	0.005	シハロトリン	0.01	フェンクロルホス	0.01
DDT (DDE、DDD及びDDTの和)	0.005	シフルトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01
EPN	0.01	シベルメトリン	0.01	フェンチオン	0.01
アクリナトリン	0.01	ジメチルピホス	0.01	フェントエート	0.01
アセタミプリド	0.01	ジメトエート	0.01	フェンバレレート	0.01
アゾキシストロピン	0.01	シメトリン	0.01	フェンピロキシメート	0.01
アルドリン及びディルドリン	0.005	スルプロホス	0.01	フェンプロパトリン	0.01
イソフェンホス	0.01	ダイアジノン	0.01	ブタクロール	0.01
イソプロカルブ	0.01	チアクロプリド	0.01	ブタミホス	0.01
イプロベンホス	0.01	チアメトキサム	0.01	ブプロフェジン	0.01
イミダクロプリド	0.01	チオベンカルブ	0.01	フルジオキシソニル	0.01
インドキサカルブ	0.01	チフルザミド	0.01	フルシトリネート	0.01
エスプロカルブ	0.01	テトラクロルピホス	0.01	フルトラニル	0.01
エチオン	0.01	テトラコナゾール	0.01	フルバリネート	0.01
エトプロホス	0.005	テトラジホン	0.01	プロシミドン	0.01
エトリムホス	0.01	テブコナゾール	0.01	プロチオホス	0.01
エンドスルファン (及び の和)	0.005	テブフェノジド	0.01	プロパホス	0.01
エンドリン	0.005	テブフェンピラド	0.01	プロビザミド	0.01
オキサミル	0.01	テフルトリン	0.01	プロメカルブ	0.01
カズサホス	0.01	テフルベンズロン	0.01	プロモプロピレート	0.01
カフェンストロール	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
カルバリル	0.01	テルブホス	0.005	ヘキサフルムロン	0.01
クレソキシムメチル	0.01	トリアジメノール	0.01	ヘブタクロール (エポキシドを含む)	0.005
クロチアニジン	0.01	トリアジメホン	0.01	ベルメトリン	0.01
クロマフェノジド	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ベンコナゾール	0.01
クロルピリホス	0.01	パラチオン	0.01	ホサロン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオンメチル	0.01	ボスカリド	0.01
クロルフェナピル	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンソン	0.01	ピフェントリン	0.01	マイクロブタニル	0.01
クロルフェンピホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
クロルプロファミ	0.01	ピラクロストロピン	0.01	メキシフェノジド	0.01
クロロクスロン	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メトラクロール	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリブチカルブ	0.01	メトリブジン	0.01
シアノホス	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	メピホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	リニユロン	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	ピリミホスメチル	0.01	リンデン(-BHC)	0.002
ジクロラン	0.01	フェナリモル	0.01	ルフェヌロン	0.01
ジコホール	0.01	フェニトロチオン	0.01		

DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

イミダクロプリド

『アドマイヤー』などの商品名で販売されている殺虫剤で、即効的な殺虫効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4～12月に実施した検査において、グリーンカール、チンゲンサイ(冷凍)、パプリカ及びほうれんそう(冷凍含む)から検出されたことがある農薬です。

クロルピリホス

『ダースバン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。果樹害虫防除用の薬剤で、特にハマキムシ類に効果があり、速効性と残効性があります。

平成22年4～12月に実施した検査において、ももから検出されたことがある農薬です。

シペルメトリン

『アグロスリン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。また、耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります。

平成22年4～12月に実施した検査において、チンゲンサイ(冷凍)、ねぎ及びほうれんそう(冷凍含む)から検出されたことがある農薬です。

フェントロチオン

『スミチオン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。幅広い分野の多くの種類の害虫に対して効果があり、残効性もあります。

ボスカリド

『カンタス』などの商品名で販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病や菌核病に対して高い効果があり、残効性や耐雨性もあります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4～12月に実施した検査において、いちご、トマト、パプリカ、ぶどう及びりんごから検出されたことがある農薬です。

メチダチオン

『スプラサイド』などの商品名で販売されている殺虫剤です。果実や野菜などの害虫に広く用いられており、浸透性と残効性があります。

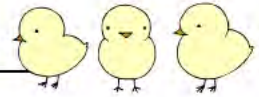
参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)
- ・農林水産消費安全技術センター及び各農薬製造会社H.P.

【検査研究課 微量汚染物担当】



輸入鶏肉中の動物用医薬品検査結果



平成23年1月～2月に食品専門監視班が収去した、市内に流通する輸入鶏肉の筋肉9件及びかも肉の筋肉1件について、動物用医薬品の合成抗菌剤28項目及び内寄生虫用剤1項目の検査を行いました。その結果、いずれの項目も不検出でした。

表 動物用医薬品の検査結果

項目名	検査結果（カッコ内の数字は基準値）		検出限界
	鶏肉<9件>	かも肉<1件>	
【合成抗菌剤】			
エンロフロキサシン (シプロフロキサシンを含む)	N.D. (0.05)	N.D. (0.05)	0.005
オキシニック酸	N.D. (0.03)	N.D. (*)	0.01
オフロキサシン	N.D. (0.05)	N.D. (*)	0.01
オルビフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
オルメトプリム	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	0.02
クロピドール	N.D. (5)	N.D. (5)	0.01
サラフロキサシン	N.D. (0.01)	N.D. (*)	0.01
ジフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファキノキサリン	N.D. (0.05)	N.D. (0.1)	0.01
スルファジアジン	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	0.01
スルファジミジン	N.D. (0.10)	N.D. (0.1)	0.01
スルファジメトキシシン	N.D. (0.05)	N.D. (0.1)	0.01
スルファドキシシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファピリジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメキサゾール	N.D. (0.02)	N.D. (*)	0.01
スルファメキシピリダジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメラジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファモノメトキシシン	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
ダノフロキサシン	N.D. (0.20)	N.D. (0.2)	0.01
チアンフェニコール	N.D. (0.02)	N.D. (*)	0.01
トリメプリム	N.D. (0.05)	N.D. (0.05)	0.02
ナリジクス酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ノルフロキサシン	N.D. (0.02)	N.D. (0.1)	0.01
ピリメタミン	N.D. (0.05)	N.D. (*)	0.02
ピロミド酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
フルメキン	N.D. (0.5)	N.D. (*)	0.01
フロルフエニコール	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	0.01
マルボフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
【内寄生虫用剤】			
フルベンダゾール	N.D (0.20)	N.D (0.2)	0.002

単位:ppm N.D.:不検出 *:「含有しない」 検出限界:検出される最小の限界量

【検査研究課 微量汚染物担当】

感染症発生動向調査委員会報告 2月

今月のトピックス

- A型肝炎の届出がありました。千葉県での感染と思われます。
- オウム病の届出がありました。感染経路は不明です。
- 劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告が2件ありました。
- インフルエンザの報告が減少しています。A型の報告が1424件、B型の報告が1098件と、B型の報告割合は増加しています。
- 流行性耳下腺炎の報告がこの時期にしては多めに推移しています。

全数把握疾患

<細菌性赤痢>

2月は23日現在で1例の報告がありました。インドでの感染と思われます。

<パラチフス>

2月は23日現在で1件の報告がありました。ミャンマーでの感染と思われます。

<A型肝炎>

2月は23日現在で1件の報告がありました。千葉県での経口感染と思われます。千葉県で複数報告のあった集団発生群とシークエンスで遺伝子が一致しています。A型肝炎についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hav1.html>

<オウム病>

2月は23日現在で1件の報告がありました。オウム病は、鳥類の排泄物に含まれるクラミジアによる感染症です。インフルエンザ様の症状を呈する異型肺炎等の肺臓炎の型と、肺炎症状が顕著でない敗血症様症状を呈する型とがあります。高熱での突然発症が多いですが、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などが時にみられます。時には、髄膜炎、多臓器障害、ショック症状を呈し、死に至る可能性もある疾患です。

オウム病についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/psittacosis1.html>

<マラリア>

2月は23日現在で1件の報告がありました。ガーナでの感染と思われます。熱帯熱マラリアでした。

<ウイルス性肝炎>

2月は23日現在で1件の報告がありました。C型肝炎でした。C型肝炎は、急性肝炎を発症した後、30～40%ではウイルスが検出されなくなり、肝機能が正常化するが、残りの60～70%はウイルスが残りHCVキャリアになり、多くの場合、急性肝炎から慢性肝炎へ移行します。慢性肝炎から自然寛解する確率は0.2%と非常に稀で、10～16%の症例は初感染から平均20年の経過で肝硬変に移行します。肝硬変の症例は、1年あたり5%以上と高い確率で肝細胞癌を発症します。C型肝炎についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hcv1.html>

急性ウイルス性肝炎は、C型肝炎も含めた全てが届出の対象です。

届出基準と届出様式については、横浜市衛生研究所 HP を御覧ください。

届出基準 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/kijun/go02.pdf>

届出様式 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/yousiki/go02.pdf>

<劇症型溶血性レンサ球菌感染症>

2月23日現在で2件の報告がありました。1件は創傷感染によるものでした。

1件が扁桃腺炎による感染でした。劇症型溶血性レンサ球菌感染症についてはこちらを御覧ください。

国立感染症研究所 HP http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html

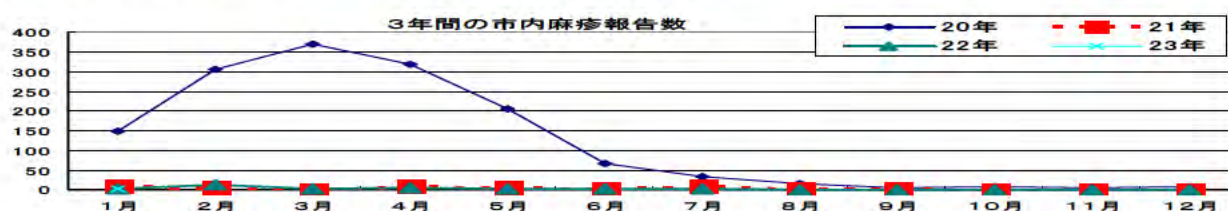
<急性脳炎>

2月23日現在で2件の報告がありました。1件はインフルエンザB型、1件は原因不明です。

<麻疹>

2月23日現在で1件の報告がありました。10歳の方です。きょうだいからの感染と思われます。ワクチン接種歴はありませんでした。ウイルスの genotype は D9 でした。平成20年には市内では1485人の届出がありました。平成21年には43人、平成22年には32人と激減しています。また平成22年には30件程度、届出の取り下げがみられました。平成23年に入って4人の届出があり、2人にPCRで麻疹ウイルスが確認されていますが、1人がフィリピンでの感染で、もう1人はそのきょうだいの感染でした。麻疹についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html>



定点把握疾患

平成23年1月17日から2月20日まで(平成23第3週から第7週まで。ただし、性感染症については平成23年1月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

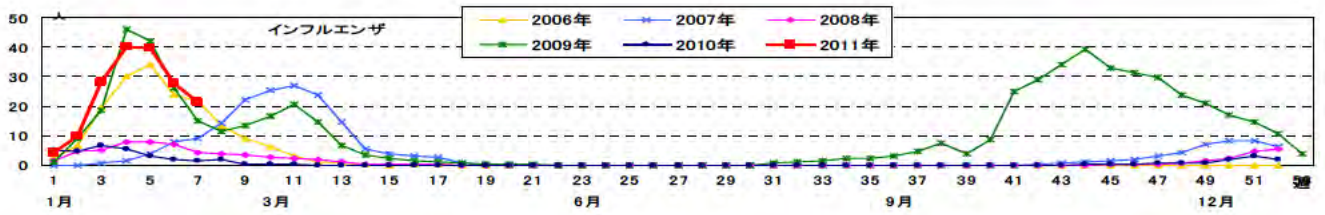
第3週	1月17～23日
第4週	1月24～30日
第5週	1月31～2月6日
第6週	2月7～13日
第7週	2月14～20日

1 患者定点からの情報

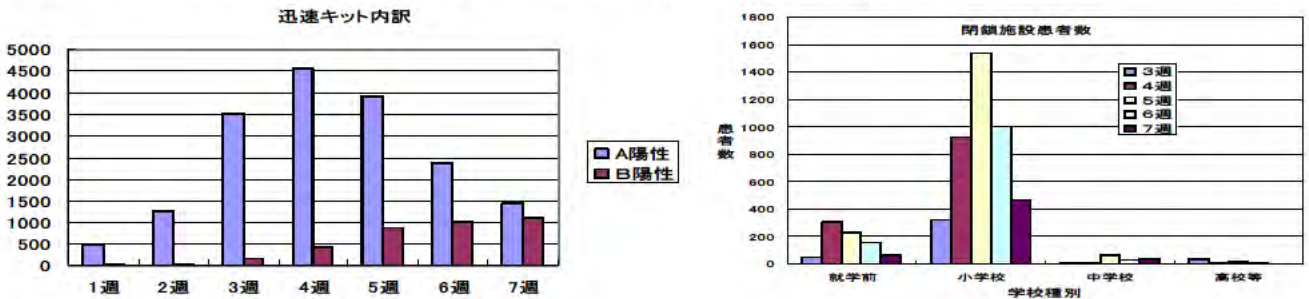
市内の患者定点は、小児科定点:91 箇所、内科定点:59 箇所、眼科定点:18 箇所、性感染症定点:26 箇所、基幹(病院)定点:3 箇所の計 197 箇所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計 150 定点から報告されます。

<インフルエンザ>

第7週は定点あたり21.27でした。第6週の27.64より低下しています。定点あたり30を超えた行政区は、都筑区(32.63)、神奈川区(32.40)のみでした。神奈川県では21.92、川崎市は21.78、全国16.35、東京都16.28でした。

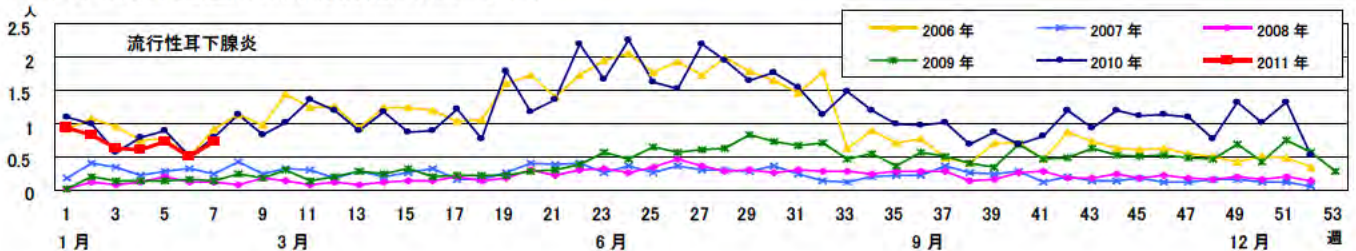


定点医療機関の協力で行われている迅速キットの内訳は、第7週はA型 1424 件、B型 1098 件で、43% がB型でした。施設閉鎖は、第7週では、33 施設、570 人と、減少傾向です。



< 流行性耳下腺炎 >

第7週は定点当たり 0.72 でした。過去5年との比較では、高めに推移しています。神奈川県は 0.62、川崎市は 0.52、全国 0.98、東京都 0.28 です。



< 基幹定点 >

週報では、第4～6週に、マイコプラズマ肺炎が4件報告されています。

月報では1月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が14例、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は0例、薬剤耐性緑膿菌感染症は0例でした。

2月から薬剤耐性アシネトバクター感染症が5類の基幹定点の報告に追加されました。薬剤性アシネトバクター感染症の届出は、3月以降の委員会報告に反映される予定です。届出基準、報告用紙については、横浜市衛生研究所 HP を御覧ください。

届出基準 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/kijun/go02.pdf>

届出様式 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/yousiki/go02.pdf>

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

2月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点53件(鼻咽頭ぬぐい液49件、ふん便3件、嘔吐物1件)、内科定点14件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点13件(鼻咽頭ぬぐい液)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ(疑い例を含む)39人、上気道炎5人、下気道炎2人、胃腸炎5人、りんご病、突発性発疹症各1人、内科定点はインフルエンザ(疑い例を含む)13人、上気道炎1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点はインフルエンザ(疑い例を含む)11人、脳症、上気道炎各1人でした。

3月10日現在、小児科定点のインフルエンザ患者4人からインフルエンザウイルスAH1pdm(以下AH1pdm)型、インフルエンザ患者8人と胃腸炎患者1人からインフルエンザウイルスAH3(以下AH3)型、インフルエンザ患者9人からインフルエンザウイルスB(以下B)型、上気道炎患者2人からアデノウイルス、内科定点のインフルエンザ患者6人からAH1pdm型、1人からAH3型、1人からB型、基幹定点のインフルエンザ患者1人からAH1pdm型、2人からAH3型、インフルエンザ患者1人と脳症患者1人からB型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点のインフルエンザ患者1人からAH1pdm型、6人からAH3型、インフルエンザ患者8人と下気道炎患者1人からB型、内科定点のインフルエンザ患者3人からB型、基幹定点のインフルエンザ患者2人からAH1pdm型の遺伝子が検出されています。また、B型が分離された基幹科定点の脳症患者から、AH1pdm型の遺伝子も検出されました。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

<細菌検査>

2月の感染性胃腸炎関係の受付は、基幹定点からの菌株受付8件で、その内訳は赤痢菌1件、パラチフスA菌2件、不検出5件でした(表)。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの5件で、そのうち2件からA群溶血性レンサ球菌が検出されました。その血清型はT1、T12、でした。

バンコマイシン耐性腸球菌感染症の受付は定点以外の医療機関からの1件で、van遺伝子は検出されませんでした。

表 感染症発生動向調査による病原体調査(2月) 細菌検査

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	2月			2011年1~2011年2月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌		1			1	
腸管病原性大腸菌						
腸管出血性大腸菌						1
腸管毒素原性大腸菌						
チフス菌						
パラチフスA菌		2			2	
サルモネラ						
カンピロバクター						
黄色ブドウ球菌						
不検出		5		1	10	1

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	2月			2011年1~2011年2月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌						
T1	1			2		
T4						
T6						
T12	2			3		
T13						
T25						
T28						
T B3264				1		
型別不能						
G群溶血性レンサ球菌						
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					1	
バンコマイシン耐性腸球菌						14
髄膜炎菌						
<i>Streptococcus suis</i>						
<i>Corynebacterium ulcerans</i>						
<i>Legionella pneumophila</i>						
セレウス菌						
破傷風菌						
不検出	2	0	1	2	0	1

* 定点以外医療機関(届出疾病の検査依頼)

** 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

[検査研究課 細菌担当]

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成23年1月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成23年2月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成23年1月のアクセス件数、アクセス順位及び平成23年2月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成23年1月)

平成23年1月の総アクセス数は、217,911件でした。主な内訳は、感染症67.5%、食品衛生10.8%、保健情報8.6%、検査情報月報4.7%、生活環境衛生1.2%、薬事1.0%でした。

(2) アクセス順位 (平成23年1月)

1月のアクセス順位(表1)は、第1位が「肺炎球菌感染症について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「衛生研究所トップページ」でした。

第1位は「肺炎球菌感染症について」でした。

肺炎球菌感染症は、ワクチン(予防接種)によって予防できる病気(Vaccine-Preventable Diseases: VPD)の一つとされています。

日本では、従来、免疫力が低下した高齢者等には、23価の肺炎球菌ワクチンが任意接種として使用されてきました

が、平成21年10月に小児用の肺炎球菌ワクチン(7価)が承認され、平成22年2月から、任意予防接種として乳幼児に使用されるようになりました。

横浜市では、平成22年10月から「重度の内部機能障害のある方が23価肺炎球菌ワクチン接種」を受ける際に費用の一部を助成しています。また、平成23年2月1日から平成24年3月31日まで「小児用肺炎球菌ワクチン」、「ヒブ(Hib)ワクチン」、「子宮頸がんワクチン」を無料(公費負担)で接種できるようになりました。

第10位には「ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症について」が入っており、肺炎球菌感染症だけでなく、Hib感染症についても関心が高かったものと考えられます。

肺炎球菌とヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)は、小児の細菌性髄膜炎の主要な原因といわれています。細菌性髄膜炎は、初期の診断が難しく、かかると治療が困難な疾患です。ほとんどが、5歳未満の幼児に発症し、なかでも0歳児に多く発症がみられています。また、細菌性髄膜炎の治療には、抗菌薬を使いますが、最近では、抗菌薬の効きにくい肺炎球菌やHibが増加しています。これらのことから、早い時期にワクチン接種を受けることが発症予防の効果につながると考えられます。

一方で、一部市町村でワクチン接種後の死亡例が発生したことから、厚生労働省は、平成23年3月4日に「小児用肺炎球菌ワクチン」及び「ヒブワクチン」接種の一時的見合わせについて決定しました。

表1 平成23年1月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	肺炎球菌感染症について	13,532
2	マイコプラズマ肺炎について	13,450
3	衛生研究所トップページ	4,929
4	感染症発生状況	3,692
5	臨時情報	3,516
6	RSウイルスによる気道感染症およびパピロウイルスマブ(シナジス)について	2,617
7	アシネトバクター感染症について	2,508
8	サイトメガロウイルス感染症について	2,488
9	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	2,449
10	ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症について	2,421

データ提供:総務局IT活用推進課

厚生労働省の決定を受け、横浜市としても該当ワクチン接種を当面の間見合わせることにしています(平成23年3月8日現在)。

第2位は「マイコプラズマ肺炎について」でした。

国立感染症情報センターの報告によると、マイコプラズマ肺炎の定点当たりの報告数は、3週(1/3~23)連続して、増加し、過去5年間の同時期と比較して、かなり多い状況でした。12月上旬から流行が見られ、アクセス数が多かったものと思われます。

第3~5位は「衛生研究所トップページ」、「感染症発生状況」、「臨時情報」でした。

これらは、「インフルエンザ」や「感染性胃腸炎」等の市内発生状況をタイムリーに掲載しているページです。流行期に入り、関心が高く、アクセス数が増加したものと思われます。

(3) 電子メールによる問い合わせ (平成23年2月)

平成23年2月の問い合わせは、2件でした(表2)。

表2 平成23年2月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
サイトメガロウイルスについて	1	感染症・疫学情報課
ポリオ後症候群について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事 (平成23年2月)

平成23年2月に追加・更新した主な記事は、17件でした(表3)。

表3 平成23年2月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
2月 1日	感染症法が一部改正され【届出基準・届出様式】の変更	更新・追加
2月 1日	人間への感染が見られたA型インフルエンザウイルスの亜型について	更新
2月 2日	肺炎球菌感染症について	更新
2月 3日	衛研 Q&A - 破傷風(はしょうふう)編 -	追加
2月 3日	感染症に気をつけよう (2月号)	追加
2月 4日	細菌性髄膜炎を知っていますか?	追加
2月 4日	〔こどものワクチン〕肺炎球菌ワクチンを知っていますか?	追加
2月 4日	〔こどものワクチン〕ヒブ(Hib)ワクチンを知っていますか?	追加
2月 9日	横浜市感染症発生動向調査事業概要の掲載	追加
2月16日	エンテロウイルスについて	更新
2月16日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)について	更新
2月16日	チクングニヤ熱について	追加
2月24日	高病原性鳥インフルエンザの発生状況	更新
2月25日	保健統計資料の活用	更新
2月25日	保健統計データ集	更新
2月25日	新型インフルエンザ(AH1pdm)について	更新
2月25日	横浜市インフルエンザ等流行情報 8号	追加

【 感染症・疫学情報課 】